

『本朝皇胤紹運録』に記載された文徳天皇の皇子女は、天皇(清和)一名、親王四名、内親王十名、賜姓源氏として、皇子八名、皇女七名、総数三十名である¹⁾。この他、女王として三名の名が記載されているが、これは先の考察により除外した²⁾。文徳天皇皇女のもっとも顕著な特徴は、紀氏所生の皇女と滋野氏所生の皇女の対照的な在り方といえるのではないだろうか。特に〈皇女〉にみられる端的な例としては、伊勢斎宮と賀茂斎院の卜定状況にそれを見ることが出来る。

周知のように紀氏は静子所生の惟喬親王が、藤原明子所生の惟仁親王(清和天皇)と皇太子争いをしたという数々の伝承が残されている。惟喬親王が、文徳天皇の第一子であり、文徳天皇が惟喬親王を皇太子にしたい意向が事実であったとしても、台閣における外戚紀氏の政治勢力の状況をみれば、それが実現可能であったとは考えがたい。しかしながらわずかも可能性があれば人の心を惹きつける状況であったこともまた事実であろう。『伊勢物語』の東下りの段、狩りの使いの段、あるいは『吏部王記』逸文などの記述はそうあって欲しいという人々の願望があったことを示している。

『公卿補任』によれば、文徳天皇が即位し、皇太子が定められた嘉祥三(八五〇)年の台閣の状況は左大臣源常、右大臣藤原良房、大納言源信、中納言源弘、安倍安仁、源定、橘岑継であり、参議は藤原良相、伴善男、滋野貞主、藤原助、藤原長良、小野篁であった。ここに紀氏の名はなく、外祖父の名虎も、三年前の承和十四年(八四七)年に卒している。いかに惟喬親王が文徳天皇の第一皇子であり、父文徳天皇が望んだとしても、惟喬親王を支える外戚勢力の脆弱さは明らかな現実であった。文徳天皇の治世は承和の変と応天門の変という大きな政変があり、この二つの変を経て、藤原北家の政治的寡占の礎が確定したと言われている。しかしこれらの変の経緯、真相については、いまだ諸説あり定説をみない。藤原良房が積極的にかうした変に関わったか(陰謀説)、あるいは不安定な政治状況の中で、臨機応変に対処した結果として権力を確立したか(否陰謀説)という点について、文徳天皇の皇女の状況、特に斎王卜定の状況からみる限りは後者ではないかと考えられる。以下、その点について述べてゆきたい。

榎村寛之氏は、九世紀前半の斎王制度はもともと順調であっ

た時期であり、斎王は天皇の莊嚴装置として本来的に機能していたとされる³⁾。この状況を鑑みれば、文徳天皇即位時に直系の晏子・慧子両内親王がそれぞれ伊勢・賀茂の斎王に選ばれたのは、両親王が、文徳天皇の皇女の中で、年齢的にいつて年長の方であつたと考えてよいであろう。『本朝皇胤紹運録』を初めとする系譜史料は生母の身分による配列になっていると考えられるが、その中で『一代要記』に晏子内親王が「帝一女嘉祥三年卜定」と注されているのは、父系第一女を意味する痕跡と考えられる。賀茂斎院となつた慧子内親王は『一代要記』では「帝四女嘉祥三年立之元慶五年薨」と記されている。この時点で出生している可能性が考えられ、斎王候補となりうる直系の皇女は、晏子・慧子両内親王のほかには、参考一覧(後掲)にみられる滋野奥子所生の濃子・勝子両内親王・礼子内親王・恬子内親王があげられる。この六人の候補の中で、文徳天皇の生母が藤原順子であることを考えれば、藤原氏所生の内親王を優先したということも考えられる。しかし、後述の文徳天皇の二代目の賀茂斎院として候補に藤原氏所生の皇女もいる中で、紀静子所生の述子内親王が選ばれていることから、最初の場合も特に藤原氏を優先したのではなく、晏子内親王が第一女であり、それにとまって同母ではないとしても同系の慧子両内親王が斎王となつたのではないかと推測される。

さて、文徳天皇の最初の賀茂斎院であつた慧子内親王が事情

により廃された時点で、二代目の斎院として紀静子所生の述子内親王が選ばれたのであるが、その点について以前は、それを文徳天皇が惟喬親王を即位させたいというあらわれであるとの見解を示した⁴⁾。しかし全体を総括して考えた場合、それは修正すべきであると考ええる。

伊勢が国家の、賀茂が京都の守護神として、天皇の權威の両輪として順調に機能していたとすれば、紀静子所生の述子内親王が文徳天皇二代目の賀茂斎院となつたことが、第一皇子を有する紀氏に皇位へ関わる風聞が生まれる要因の一つとなつた、とはいえると思う。つまり、いままでの考えとは逆であつたということである。このとき、後任の斎王として資格があつた直系の内親王は、滋野奥子所生の濃子内親王、勝子内親王をはじめ、藤原明子所生の儀子内親王、藤原今子所生の礼子内親王、掲子内親王、そして紀子静子所生の恬子内親王、述子内親王であつた。その中で述子内親王が選ばれたのであつた。結果からみて、文徳天皇の二代目の斎王、つまり中継ぎの斎王としては母系からみた長女が避けられたといえるかと思う。したがって、勝子内親王、掲子内親王、述子内親王の三名が候補として残る。掲子内親王は、後に陽成天皇の二代目の伊勢斎宮となつて、ことさらにいっても、ここで述子にかわって選ばれていたとしても不思議はなかった。ではなぜ述子内親王だったのか。述子内親王は『一代要記』には「帝五女天安元年立之同六年退云々」

と記されている。廢齋院の慧子内親王は『一代要記』に「帝四女」とあり、述子は晏子・慧子・恬子よりは下であるのであと一人をはさんだ五番目となる。藤原氏所生の舘子内親王がこのときに選ばれなかったことから述子より下であったのではないかと考えられる。残るのは滋野奥子所生の勝子内親王であるが、勝子内親王が述子より上だったとしても大差はなく、述子内親王と比較した場合、紀氏は光仁天皇の生母として紀椽姫がおり、椽姫は光仁天皇によって贈皇太后とされているため、滋野氏所生の内親王よりも相応しいと見なされたのではないだろうかと思われるのである。滋野氏は前代の淳和天皇の二代目の賀茂齋院時子女王（仁明皇女）が、貞主の長女である滋野繩子所生であつたから、滋野氏が氏として齋王を出すのに問題があつたわけではない。ただ、どちらがより相応しいかということになつた場合、紀氏所生の内親王が選択されたということになるのではないかと考えるのである。滋野氏は紀直を祖とし、紀名虎は紀臣を祖とすることが分かれ目になったとも考えられるが、文徳天皇時代の政治勢力という点では滋野貞主の存在は紀氏の人々よりも大きい。結局は結果から考えるしかないのであるが、同母兄弟の長幼も考慮すれば、文徳天皇の第一皇子である惟喬親王の同母妹という点からも述子内親王が相応しいと見なされたのである。文徳天皇の代の齋王は、直系の内親王が父系からの関係を主軸に、母系の要因を考慮して、天皇の莊嚴装置と

して順当に選ばれていたと考えた場合、特に問題はないようである。

さて、榎村氏は、天安二年（八五八）、文徳天皇の死によって即位した清和天皇の齋王として、同母妹の儀子内親王が賀茂齋院、紀氏所生の恬子内親王が伊勢齋宮に卜定されたことをもつて、齋王制度に一つの転換があつたとする。清和天皇はわずか九歳で即位した幼帝であり、当然のことながら直系の内親王は存在していない。そこで同母妹の儀子内親王を賀茂齋院とし、異母妹の恬子内親王を伊勢齋宮とした。ここに伊勢よりも賀茂を重視する風潮がはじまつたという点で一つの転換期と捉えるのである。儀子内親王が、伊勢齋宮となつた恬子内親王より上流で禊ぎを行っていることからいっても賀茂重視といえるであろう。しかし伊勢齋宮が忌避されたとしても清和天皇の齋王として紀氏所生の恬子内親王が卜定されたということは、一考すべき問題である。このとき、文徳天皇の内親王の中で、候補となりうる内親王は滋野奥子所生の濃子内親王、勝子内親王、藤原今子所生の礼子内親王、舘子内親王、そして紀静子所生の恬子内親王の五名の内親王であつた。その中で藤原氏所生の内親王ではなく、紀氏所生の内親王が選ばれた、ということは、藤原良房としては、他氏との連携が念頭にあつたと解せるのではない。賀茂を重視し、伊勢を忌避したといつても、いきなり国家を護る守護神との関係をおろそかにはできない。齋王は天

皇を補弼する精神的な任であり、人心の問題である。人々の意識を一朝一夕に転換することはできない。良房にとって外孫である清和天皇は前例を無視しても皇位に据えたかつた掌中の玉である。賀茂を重視しつつ、伊勢にも相応の内親王を送つたと考えるべきであろう。清和天皇即位時の台閣の状況は、太政大臣藤原良房、左大臣源信、右大臣藤原良相、大納言安倍安仁、中納言源定、平高棟、源弘、橘岑繼、参議伴善男、藤原氏宗、源多、藤原貞守、藤原良繩であつた。滋野貞主は六年前の仁寿二年（八五二）に卒している。良房が一直線に藤原氏寡占を目指していたとすれば、国家神として天皇を嘉する伊勢の齋宮としては、参議藤原貞守の外孫である礼子内親王の方がふさわしい。しかし、他氏との連携を考えたとすれば文徳天皇の第一皇子を擁し、現王朝の祖に連なる紀氏からの齋王は、幼帝清和を守護するものが藤原氏だけではないという示威ともなりえたのである。齋王は、天皇と神を結ぶ神聖な存在である。この清和天皇の齋王についてみる限り、藤原良房が積極的に他氏を排除しようとしていたというよりは、よくいえば取り込もうと、悪くいえば利用しようとしていたといえるのではないだろうか。むしろ、文徳天皇の第一皇子であつた惟喬親王が帝位につくことができなかったからこそ皇祖神への齋王はせめて紀氏所生の第一皇女である恬子内親王とした、と解すべきように思う。さきに恬子内親王の同母妹を文徳天皇の二代目の賀茂齋院にし、

母系第一女である恬子内親王を温存したのは、すでに病が重くなりつつあつた文徳天皇の容態を考え、次代を見据えてのことであつたのかも知れない。文徳天皇が崩御した時点で、藤原良房は太政大臣として左大臣の源信よりも上位にあり、また右大臣は良房の弟である良相であつた。太政大臣の職掌についてはこの時期、いろいろと問題はあるが、地位的にみて台閣で左大臣よりも上位にあるということは確かである。したがって候補をあげてのち、卜定によって神意を確認するという齋王の決定方法から考えて恬子内親王の伊勢齋宮卜定には良房の意向が反映していたはずである。

米田雄介氏は応天門の変において、良房の摂政への経緯を丹念にたどられた結果、この変における藤原氏の陰謀説を否定している。また森田悌氏は藤原良房の政治姿勢は、「新官人群」や「良吏」とされた他氏族を含む人々に依りつつ政治を行うというものであつたとされる。それらの見解にのつとれば、清和天皇即位の際に、紀氏出身の恬子内親王の伊勢齋宮卜定には何ら問題や疑問が生じない。皇女の齋王卜定の状況からみて、文徳天皇の齋王卜定は原則に忠実に行われ、次代清和天皇の齋王も、幼帝即位という前例のない事態の中で、極力原則に忠実に、天皇の即位を万全にしようとする意図の結果であつたと考えられるのである。

こうした時代の流れの中で、紀氏所生の皇子女は皇位から

む悲運の皇子として、あるいは業平との艶聞に絡む皇女としての伝承が伝わり、一方滋野氏所生の皇子女は、斎王になることもなく、そうした伝承とは全く無縁であった。『文徳実録』仁寿二年（八五二）二月八日条の外祖父貞主の卒伝には「時人以爲外孫皇子。一家繁昌。乃祖慈仁之所及也」と内親王として恙なく平穩無事の生涯を思わせる一文がみられるだけである。滋野氏所生の皇女女は、紀氏所生の皇子女と比較したとき、対照的な存在であり、その違いがあまりにも鮮やかであることが印象に残る。

文徳天皇の皇女その他の特徴として指摘できる点は、藤原氏出身の女性には、主流、傍流にかかわらず、所生の皇子女はすべて親王となっているが、滋野氏は貞主の娘の産んだ皇子女のみ親王となり、貞主の弟貞雄の娘が産んだ皇子女は源氏に賜姓されている。主流と傍流とに明確な違いが見られる。藤原良房の娘明子は、生母が嵯峨源氏潔姫であるため別格としても、文徳朝の斎王となった晏子と慧子両内親王の外祖父、藤原利貞は眞夏孫であつて、良房とはやや離れ、また礼子・掲子両内親王の外祖父、藤原貞守は、北家とはいっても、更に遠く、房前男楓麿の流れである。しかしながらすべて所生の皇子女は親王宣下を受けた。こうした結果をみれば、藤原氏一族は他氏とは一線を画すべき氏族であつたことがあらためて認識される。

また源氏に賜姓された皇子女をみると、仁寿三年（八五三）と、貞観三年（八六一）に賜姓された記事があり、またそれ以外の皇子として賜姓記事の残らない源毎有（丹墀氏）、源定有（菅野氏）、源富有（生母不明）がいる。仁寿の賜姓は文徳天皇が即位した二年後であり、天皇在位中であるが、貞観の賜姓は文徳薨去三年後であつた。どちらも天皇即位後の皇室体制の整備の一貫であつたと考えられる。

賜姓源氏の皇女の中では、清和天皇の女御としてあげられている源済子が特記すべき存在であろう。詔による入内であつた。しかし元慶三年（八七九）三月七日、すでに上皇になつていた清和が後宮整理を行つたと思われる時に、他の十一名とともに季料月俸が停止されており、とくに帝寵があつたとは思われない。

停太上天皇女御從二位藤原朝臣多美子、從四位上嘉子女王、從四位上兼子女王、忠子女王、正四位下平朝臣寛子、從四位上源朝臣済子、從四位下源朝臣斂子。藤原朝臣頼子、正五位下源朝臣暄子、藤原朝臣佳珠子、源朝臣宣子十一人季料月俸。縁太上天皇勅也。

『三代実録』

文徳の内親王の中でもっとも長生きをした掲子内親王は、実

に六代に渡る天皇の治世を見て、醍醐天皇在位の延喜十四年に亡くなった。ちなみに醍醐朝まで生存していた内親王は他に晏子（藤原則子所生）・濃子（滋野奥子所生）・礼子（藤原今子所生）・恬子（紀静子所生）・述子（紀静子所生）内親王たちである。

（一文字昭子）

吉川弘文館

¹ 「帝王編年記」では賜姓源氏（皇子）七名（富有ナシ）、賜姓源氏（皇女）は源馮子のみ記載。「一代要記」賜姓源氏（皇子）七名（富有ナシ）、ただし賜姓源氏（皇女）は「本朝皇胤紹運録」と同数であるが、氏名はやや異なる。

² 拙稿「皇女総覧二十五、柄子女王・斂子女王・昭子女王（文徳天皇）」（『瞿麦』二十三号、平成二十年五月刊）による。なお瞿麦二十三号表紙では「皇女総覧（二十四）」となつてゐるが、実際は「皇女総覧（二十五）」である。また当該「瞿麦」は奥付の発行年が「平成十九年」となつてゐるが、実際は「平成二十年」である。

³ 榎村寛之「斎王制と天皇制―特に血縁関係を中心に―」（『古代文化』巻四三・一九九一年四月）

⁴ 拙稿「皇女総覧（二十三）晏子内親王・慧子内親王（文徳天皇皇女）」（『瞿麦』第二十一号・平成十八年十二月）

⁵ 米田雄介『藤原摂関家の誕生―平安時代史の扉』（二〇〇二年・吉川弘文館）

⁶ 森田悌『平安時代政治史研究』（昭和五十三年（一九七八）・

文德天皇皇子女一覽

外祖父 生母		内親王	親王
藤原利貞	藤原則子	晏子(文德朝伊勢齋)	
藤原利貞	藤原列子	慧子(文德朝賀茂齋)	
藤原良房	藤原明子	儀子(清和朝賀茂齋)	
紀名虎	紀靜子	恬子(清和朝伊勢齋)・述子(文德朝賀茂齋二代目)・珍子	惟仁(清和) 惟高・惟條 惟恒 惟彦
藤原貞守	藤原今子	禮子・掲子(楊子)(陽成朝伊勢齋二代目)	
滋野貞主	滋野奥子	濃子・勝子	
外祖父 生母	賜姓源氏		源本有・源戴有
滋野貞雄	滋野岑子	源淵子(滋子)	源能有
伴氏			源每有
丹堀氏			源時有
清原氏			源定有
菅野氏	源富子※但し、定有と同母かどうかは不明		源行有
布勢氏			源富有
不明	源馮子・源謙子・源奥子・源列子・源濟子(清和女御)		

文德天皇内親王一覽(生母別)

●凡例
●年代が確定しているもの
▲誕生した可能性がある年。
▲がない場合は順位および確定している年から考えて妥当な誕生の可能性の範囲を示す。
▲誕生した可能性が高い年を示す。したがって複数の場合がある。
〔 〕 年齢
〔 〕 同母兄弟
齋王のあとの数字は代を示す。賀茂齋2は同じ天皇の二代目の齋王ということである。
内親王の名前の横の数字は『一代要記』に記載された内親王の順位。述子は文德天皇の項、儀子は清和天皇の項で五女とされる。
晏子と慧子は外祖父および生母が異なると考えられる。詳細は「瞿麦」二十一号、皇女総覧二十二を参照。

		右:外祖父等	藤原利貞(皇雄)	藤原良房	紀名虎	藤原貞守	滋野貞主
		右:生母	則子 列子※	明子	靜子	今子	奥子
西暦	元号	右:皇女名 下:天皇記事	晏子1 慧子4	儀子5	恬子 述子5 珍子	禮子 掲子	濃子 勝子
842	承和 9年	文德天皇元服[15]	誕生				
843	10年						
844	11年		誕生		誕生		誕生
845	12年				誕生		
846	13年				誕生		
847	14年				誕生		
848	嘉祥 元年				誕生		
849	2年				誕生		
850	3年	文德天皇即位[24]	伊勢齋	誕生	誕生		
851	仁寿 元年			誕生			
852	2年		賀茂齋	誕生			
853	3年			誕生			
854	斉衡 元年			誕生			
855	2年			誕生			
856	3年			誕生			
857	天安 元年			誕生			
858	2年	清和天皇即位[9]	退下	誕生			
859	貞観 元年			誕生			
860	2年			誕生			
861	3年			誕生			
862	4年			誕生			
863	5年			誕生			
864	6年			誕生			
865	7年			誕生			
866	8年			誕生			
867	9年			誕生			
868	10年			誕生			
869	11年			誕生			
870	12年			誕生			
871	13年			誕生			
872	14年			誕生			
873	15年			誕生			
874	16年			誕生			
875	17年			誕生			
876	18年	陽成天皇即位[9]		誕生			
877	元慶 元年			誕生			
878	2年			誕生			
879	3年			誕生			
880	4年	清和上皇崩御		誕生			
881	5年			誕生			

		右:外祖父等		藤原利貞(是雄)		藤原良房	紀名虎			藤原貞守		滋野貞主	
		右:生母		則子	列子※	明子	靜子			今子		奥子	
西曆	元号	右:皇女名 下:天皇記事		晏子1	慧子4	儀子5	恬子	述子5	珍子	禮子	揭子	濃子	勝子
882	仁和 元年 2年	光孝天皇即位[55] 宇多天皇即位[21]									伊勢斎2 退下	(惟參載)	
883													
884													
885													
886													
887	寛平 元年 4年												
888													
889													
890													
891													
892	昌泰 元年 2年	醍醐天皇即位[13]											
893													
894													
895													
896													
897	延喜 元年 2年												
898													
899													
900													
901													
902													
903													
904													
905													
906													
907													
908													
909													
910													
911													
912													
913													
914													
915													
916													
917													